
鬼戦記～黒と白～

真鍋 螢火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼戦記〜黒と白〜

【Nコード】

N0099Z

【作者名】

真鍋 螢火

【あらすじ】

黒が禁忌とされた時
とある兄妹がいた。だが兄は黒を持つ者、無残にも妹の前で断頭された。

あれから100年、妹である少女『リアン』は復讐を誓うが・・・

プロローグ（前書き）

始めましたが・・・グロい
書きながらヒーヒー言ってます。

プロローグ

世界を統べる者『十三光使^{じゅうさんこうし}』

彼らは黒を忌み色とし、黒を持つ者を殺した。

生まれたばかりの子でも、王の子でも・・・

黒を禁忌としたのは「力を持ちすぎ」だからだそうだ

黒は力の象徴とされる色

だが、あくまでも黒は『象徴』に過ぎない。
はつきり言って狂ってる。

だが、人はそれを受け入れた。

その人も狂ってる。

そんな時、鬼神族^{おにがみ}の王の子が黒を持って生まれた。

周りの声を恐れた王はその子を殺そうとしたが、王にそのような度胸は無かった。

その子は城に幽閉され、陽を見ることも無く鬼の歳で6の少年となった。

その時、城では世継ぎの問題が起きていた。次に生まれた子が知の象徴とされる白を持つ女であったからだ。

白は禁忌の間逆とされる聖色であったがその子は女

力の王とされる鬼神の長にはなれなかった。

そしてマズイ事に黒を持つ子である兄を見つけ、慕い始めた。

黒を持つ子を産み、心労に侵されたままの王妃は白の子を産み、死去

それによって王は愛する者を奪った黒と白を国から追放し、
12の黒の子と6の白の子の運命が別れた。

「あああああああああああ！」

とある神殿の中に響く悲鳴

神官姿の血塗れの男が大理石の床に伏せ、右手を抑える。

その右手からは赤い鮮血があふれていた。

無様だな

それを静かに眺める17程の女がいた。

白く、赤い、血色の目をした女。顔の左側に幾何学模様『鬼の証』
が存在し、右手に持つ刀で鬼神族だと示している。

「く、鬼がっ！十三光使に抗うか！」

男は憎々しげな眼差しで鬼を見つめる。

「・・・十三光使・・・お前らの狂言でどれほどの命が消えたかわかるか！」

「きよ、狂言だと！」

女は刀を振り、男の両腕を切り落とす。

「つ！くあ！」

それを見て女はほくそ笑んだ。

「お前らにわかるのか！ 黒が禁忌とされ！ どれほどの者が死んだか！ 悲しんだか！」

「禁忌が死ねば、周りの者は喜ぶはずだ……悲しむなど……ありえっ！」

言葉が終らぬままに女は背を刺す。

「急所は外す……味わうがいいさ！兄さんの痛みを！苦しみを！後悔するがいい！黒を禁忌とし、を断頭した事を！」

女は狂ったように叫び、喚く。刀を下ろし、男の体を切り裂く。骨までをも砕く。

「このような事をして、許されっ……！」

「黙れええええええええええ！」

「つ！
・
・
・
ぐ
・
・
・
あ」

捉える事のなかった心臓を女は斬り、殺してしまった。

くそっ！まだ、足りなかった！すまない……兄さん……

荒く息をつき、亡骸ばかりの神殿をリアンは見回す。

ほんの少し、兄さんの仇打ちが出来た・・・！

あと・・・12人！

リアンは刀を霧散させて納めた。途端、顔の幾何学模様がスツと消える。

私は忘れてはいないぞ！あれから100年もたったが・・・

『リアン、お前は俺の妹だ。もっと、甘えていいんだぞ。』
『うん！』

『まって！ダメエ！』
『じゃあな・・・リアン』

ヒュン・・・ドスッ

私は・・・絶対に・・・！

プロローグ（後書き）

グロいですが末永く読んでもらえるとありがたいです。
お付き合いをよろしくお願い致します。

仲間候補

滑稽だ

実に愉快だ。

リアンは横たわる死体の側を歩きながら、白い血塗れの司祭服を脱ぎ捨てる。桜をあしらった清潔な衣があらわになり一見すると普通の町娘である。神殿を後にし、陽に当たる。

陽はどの様な者にも降り注ぐのか・・・

人殺しは初めてではない。生きるため、怒り任せで人を殺してきた。そのたびに陽を感じてきた彼女はいつも通りに陽を仰いだ。言葉を残さず足に足を動かす。

ガヤガヤとうるさい商店街を抜け、宿に戻る。

「あ、おかえりなさいませ！」

元気よく宿屋の娘が語りかけてくる。宿娘にリアンが向けた笑みは冷酷な物だった。

宿娘はビクリと体を強ばらせるがリアンは無視した。

奴等以外の人間などに、興味はない。

奴等、十三光使の殺害が目的でリアンは歩いている。復讐の為に。

借りている部屋で椅子に腰掛けたリアンは後悔した。

先程の十三光使への言葉・・・最初は黒全般だったが最後には兄上についてのみ、矛盾・・・とは違うな。いや、・・・同じか？

弾んでいた気持ち疑問に変わるがかぶりを振り、『殺せばいい』と結論付けた。

これでは私も狂っているな・・・まあ、いい。次は・・・何処にするか・・・

立ち上がり、壁に掛けてある地図による。ガラス越しに触れた手の温度は氷の用だ。

ここは『ルーテン』一番近く、怪しいのは・・・『スラナ』だな。

十三光使は人に紛れて暮らしている、勘で街に行き、調べるしか無いのだ。

ちなみに調べる方法は権力トップの者と必ず十三光使は繋がって要る、だからトップの下につき、ひたすら待てば良いのだ。

さて、スラナへ行くには馬車が良いな。町に入った時調べたが・・・早朝発だったな・・・明日・・・か・・・

まだ真昼だが寝る事にした。ゆっくりベッドに潜り込むと直ぐに眠

れた。十三光使を調べる為に神殿へ潜入し、まともに寝ていなかったからだろう。

目が覚めたら朝だった。

寝過ぎたか・・・

幸いな事に陽は昇っていない。

寝られる時に寝ておいた方が良さな・・・

手で肩に届かない長さの白髪をとき、宿をでた。宿娘が寝ていた（立って）為適当な額を置いておいた。

フラリと宿を出ると冷たい風が吹き付ける。

コートを買っておくんだったな・・・

少し後悔したが時間も時間なので町の北口に足に向けた。既に何人かが馬車に乗り込んでいた。

「お！嬢ちゃんもスラナに行くのかい？」
オッサンに話し掛けられた。恐らく、馬車の所有者だろう。

「・・・ああ・・・」

「一人かい？珍しいね、250ゴールドだよ。」

黙って金額を払い、馬車に入りサイドの向かい合う形に配置された椅子に腰かけた。周りの人間は旅行者や旅人で非常にうるさい。

出発しようとした時にあわてて駆け込んできた旅人がリアンの横に座り話し掛ける。

「あの、お一人ですか？」

「・・・うむ・・・」

「そうなんですか！女性の方なのに珍しいですね！僕はアルトです！貴女は？」

「・・・リアン」

何故名前を言わねばならないのだ？・・・じゃれあうつもりはないぞ・・・

アルトは赤髪の少年で歳は15程だ、スラナの騎士団に入るために向かうらしい。「リアンさんはどうして行くんですか？」と屈託の無い笑顔で尋ねられた。

騎士団すなわち権力トップの下 初めから行くつもりだった。

「ああ、私の目的はそれだ・・・」

リアンの血色の目が光を帯びた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0099z/>

鬼戦記～黒と白～

2011年12月2日23時48分発行